

■トロッコ車輪を探しています(レールゲージ=610mm)

“東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場の軌条(トロッコレール)について”

東京大学大学院農学生命科学研究科附属農場(東大農場)は、昭和 10(1935)年 8 月に駒場キャンパスより移転開場され、すでに 74 年の歴史を刻んでいます。現在、敷地面積は、22.2ha あり、その内訳は、畑(14.5ha)、水田(1.5ha)、果樹園(2.0ha)、温室・ハウス(0.2ha)、建物敷地(4.0ha)の構成になっています。

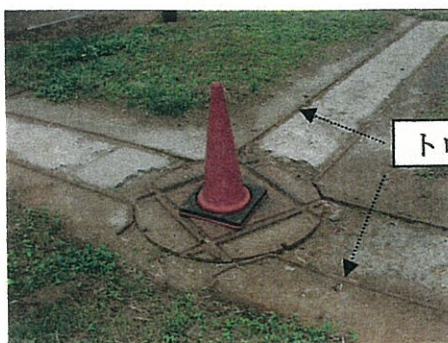
当農場は、泰西農業(ヨーロッパ)と本邦農業を合体した混合農業の形式を継承しており開場当時には、酪農研究のために「家畜の研究」と、そこから排出される糞尿・藁等を活用し「堆肥」を造り、開墾された農地の土質改良をするという、現在叫ばれている「耕畜一体型」の循環型農業の研究開発が行われていました。

その研究開発の中心施設が“飼畜場”(別紙参照)であり、その施設には乳牛舎を中心として乳牛の他に羊・豚・兎・鶏、鴨等が飼育されており、更にそれらの諸動物を飼育する為の飼料調整室やコンクリートサイロ等が配置されていました。そして、その各施設を連結しているのがトロッコレールで、近代産業で言えば、パイプライン・コンベア等に匹敵する物流装置であったと考えています。この研究開発は、昭和 40(1965)年代後半まで継続されていましたが、近隣の土地開発により、研究開発部門が他に移され、その飼畜場も変貌し他の目的に活用され、飼畜場の面影が薄れてきましたが、平成 19(2007)年乳牛舎の修復(現農場博物館)に伴い、その施設機能を痕跡として残してくれていたトロッコレールが重要視されてきました。そして、農場内に当時使用されていた車輪が存在しないか?との願いで探しましたが見つかりませんでした。

この車輪が見つれば、台車を造り、ワラその他を載せ、移動する様子を来館者に見ていただき、当時の学生の修学の一場面を実現し、生きた農場博物館に進化させたいと考えています。その車輪の在りかを探しています。ご存じの方は、東大農場まで、ご一報ください。よろしくご配慮ねがいます。



▲農場博物館(正面)



▲トロッコ回転装置



▲トロッコレール敷設状況(正面建物は農場博物館)